

形式的冪級数勉強会

2025/10/25

Harui (Twitter: @Nutoriaezu88808, GitHub: @Harui-i)

許して

私は代数をよく知らないこと、体系的にFPSを学んではいないことから、間違いや不適切な表現があるかもしれません。もしあれば、教えていただけると幸いです。

扱わない内容

- 実装の詳細
 - 色々な計算について、定数倍が速いアルゴリズムがあったり、NTTの高速な実装があったり、色々面白いトピックはあるんですが、複雑になるので省きます。

要求する知識

- 多項式の和/差/積について知っている

FPSとは？

数列 $(a_n)_{n=0}^{\infty}$ に対して、 $\sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ と書くものを通常型母関数(Ordinary Generating Function, **OGF**)といいます。

$\sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{x^n}{n!}$ と書くものを指数型母関数(Exponential Generating Function, **EGF**)といいます。

このように、数列に対応する冪級数を考えている、ということを意識することが重要な気がしています。

例

- 数列 $(3, 1, 4, 1, 5, 9)$ に対応するOGFは $3 + 1x + 4x^2 + 1x^3 + 5x^4 + 9x^5$
- 数列 $(3, 1, 4, 1, 5, 9)$ に対応するEGFは
$$3 + 1\frac{x}{1!} + 4\frac{x^2}{2!} + 1\frac{x^3}{3!} + 5\frac{x^4}{4!} + 9\frac{x^5}{5!} = 3 + x + 2x^2 + \frac{x^3}{3!} + \frac{x^4}{4!} + \frac{x^5}{5!}$$

いろいろな言葉について

- FPS(Formal Power Series) = 形式的冪級数
- OGF(Ordinary Generating Function) = 通常型母関数
- EGF(Exponential Generating Function) = 指数型母関数

形式的冪級数の演算や性質

ここでは、数列のことは一旦忘れて、FPSの演算や性質について扱います。 なので、数列→FPSの対応付けの違いであるOGF/EGFの違いは一旦忘れても大丈夫です。

FPSの和/差/積/微分/積分は、通常が多項式と同じように定義されます。

和/差/積

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n, g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n$ としたとき、

$$f + g = \sum_{n=0}^{\infty} (a_n + b_n) x^n$$

$$fg = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{j=0}^n a_j b_{n-j} \right) x^n$$

微分

極限を考えているわけではなく、こういう操作に微分という名前をつけているだけです。

$$f' = \sum_{n=1}^{\infty} n a_n x^{n-1}$$

逆元

ここからはおそらく新しい演算に見えると思います。
係数は \mathbb{Q} や $\mathbb{F}_{998244353}$ のような体上であるとします。

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ に対して、 $g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n$ を $fg = 1$ (この右辺の 1 は $(1, 0, 0, \dots)$ に対応するFPS) を満たすような g を、 f の逆元と呼びます。

f の逆元は、 $a_0 \neq 0$ なら一意に存在して、そうでないと存在しません。(証明略)(逆元を手計算で計算する方法をすれば、この条件は納得できると思います)

逆元の計算方法・例

$f = 1 - x$ の逆元 $g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n$ を求めます。

$fg = 1$ と、

$$\begin{aligned} fg &= (1 - x)g = g - xg = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n - \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^{n+1} \\ &= b_0 + \sum_{n=1}^{\infty} (b_n - b_{n-1})x^n \text{ から、 } b_0 = 1, b_n = b_{n-1} (n \geq 1) \end{aligned}$$

がわかるので、 $g = \sum_{n=0}^{\infty} 1x^n = 1 + x + x^2 + x^3 + \dots$ となります。

つまり、

$$1 = (1 - x)(1 + x + x^2 + x^3 + \dots)$$

こういう意味で、

$$\frac{1}{1 - x} = 1 + x + x^2 + x^3 + \dots$$

と書いている気がします(要出展)

逆元の手計算

$1 - x$ の逆元が $1 + x + x^2 + \dots$ であるのは知っていると思いますが、 $1 - \frac{x^2}{6} + \frac{x^4}{120}$ の逆元を手計算で求めるときは、ふつうに筆算をすればよいです(定義とも一致します)。

ここまでの演算について(仮)

ここまでの定義より、和/差/積/逆元の演算の N 項目までは、元のFPSの N 項目までの係数から計算できます。

なので、FPSの定義では無限の項数が出てきますが、実際に計算したいFPSの N 項目を求めるときは有限の計算で求められます。

exp

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ (ただし、 $a_0 = 0$) に対して、

$$\exp(f) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^n}{n!}$$

とします。 $a_0 \neq 0$ の場合、 $\exp(f)$ の0次の項に f の係数の無限和が現れてしまいかなり「気い悪い」ことになります。

(たとえば、FPSの性質である和/差/積の n 次目までの係数が、 n 次目までの係数だけで決まる、という性質が崩れます)

expの性質

- $\exp(f + g) = \exp(f) \exp(g)$
- $(\exp(f))' = f' \exp(f)$

log

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ (ただし、 $a_0 = 1$)に対して、

$$\log(f) = \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} \frac{(f-1)^n}{n}$$

とします。 $a_0 \neq 1$ の場合、 $\log(f)$ の0次の項に f の係数の無限和が現れてしまいかなり「気い悪い」ことになります。

(たとえば、FPS性質である和/差/積の n 次目までの係数が、 n 次目までの係数だけで決まる、という性質が崩れます)

logの性質

TODO: 書く

- $(\log f)' = \frac{f'}{f}$
- $\log(fg) = \log f + \log g$

微分の嬉しい性質(OGF)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ のとき、

$$x f' = \sum_{n=0}^{\infty} n a_n x^n$$

つまり、OGFにおいて、微分して x をかける操作は、数列の各項にそのインデックスをかける操作に対応します。

微分の嬉しい性質(EGF)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{x^n}{n!}$ のとき、

$$f' = \sum_{n=0}^{\infty} a_{n+1} \frac{x^n}{n!}$$

つまり、EGFにおいて、微分する操作は、数列の各項を一つ前にずらす操作に対応します。

累積和(OGF)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n$ のとき、

$$\frac{f}{1-x} = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{m=0}^n a_m \right) x^n$$

つまり、OGFにおいて、 $\frac{1}{1-x}$ をかける操作は、数列の累積和をとる操作に対応します。

OGFの積

(あたりまえかも)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n, g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n$ のとき、

$$fg = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{m=0}^n a_m b_{n-m} \right) x^n$$

OGFの積(続き)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n, g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n x^n, h = \sum_{n=0}^{\infty} c_n x^n$ としたとき

$$fgh = \sum_{n=0}^{\infty} x^n \sum_{n_1+n_2+n_3=n} a_{n_1} b_{n_2} c_{n_3}$$

もっと一般に3個以上のOGFの積についても同様に、 x^n の係数には、次数和が n であるような各項の選び型についての係数の積の総和が現れる。

OGFの積の例(重複組み合わせ, 負の二項定理)

数列 $(1, 1, 1, \dots)$ に対応するOGFは

$$\frac{1}{1-x} = 1 + x + x^2 + \dots$$

でした。これを K 個掛け合わせると、

$$\left(\frac{1}{1-x}\right)^K = (1 + x + x^2 + \dots)^K = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{n_1 + \dots + n_K = n} 1 \right) x^n$$

となり、 x^n の係数は「 n を K 個の非負整数の和として書く方法の数(足す順番の区別あり)」すなわち重複組み合わせの数に一致します。

(n 個の玉と $K - 1$ 個の仕切りを並べる方法の数え上げ)

OGFの積の例(重複組み合わせ, 負の二項定理 続き)

$$\left(\frac{1}{1-x}\right)^K = \sum_{n=0}^{\infty} \binom{n+K-1}{K-1} x^n$$

これを負の二項定理と呼んだりすることもあるらしいです。

OGFの積の例(重複組み合わせ, 負の二項定理 まとめ)

$$\sum_{n_1+n_2+\dots+n_K=n} 1 = \binom{n+K-1}{K-1}$$

これは、「 n 個の玉と $K - 1$ 個の仕切りの並べかえの数」です。

写像12相的に言うと「 n 個の区別しない玉を K 個の区別する箱に入れる場合の数(箱に入れる数は0でもいい)」でもあります。

EGFの積

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{x^n}{n!}, g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n \frac{x^n}{n!}$ のとき、

$$fg = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\sum_{j=0}^n \binom{n}{j} a_j b_{n-j} \right) \frac{x^n}{n!}$$

つまり、 $(c_n)_{n=0}^{\infty}$ の母関数が fg であるとき、 $c_n = \sum_{j=0}^n \binom{n}{j} a_j b_{n-j}$ となります。

OGFの場合との違いは、係数の積に二項係数の重みがついていることです。

EGFの積(続き)

$f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n \frac{x^n}{n!}, g = \sum_{n=0}^{\infty} b_n \frac{x^n}{n!}, h = \sum_{n=0}^{\infty} c_n \frac{x^n}{n!}$ としたとき

$$fgh = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^n}{n!} \sum_{n_1+n_2+n_3=n} \frac{n!}{n_1!n_2!n_3!} a_{n_1} b_{n_2} c_{n_3}$$

となります。4個以上のときも同様に、EGFの積の数列の n 項目には、和が n となるような次数の選び方について、係数の積に多項係数で重み付けしたものの総和が現れます。

EGFの積の例(指数関数の冪)

数列 $(1, 1, 1, \dots)$ に対応するEGFは e^x です。これを K 個掛け合わせると

$$(e^x)^K = e^{Kx} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(Kx)^n}{n!} = \sum_{n=0}^{\infty} K^n \frac{x^n}{n!}$$

となります。EGFの積を考えると、以下のように捉えることもできます。

$$K^n \frac{x^n}{n!} = \frac{x^n}{n!} \sum_{n_1+n_2+\dots+n_K=n} \frac{n!}{n_1!n_2!\dots n_K!} a_{n_1} b_{n_2} \dots c_{n_K}$$

つまり、

$$\sum_{n_1+n_2+\dots+n_K=n} \frac{n!}{n_1!n_2!\dots n_K!} = K^n$$

です。これは、 n 個の区別する玉を K 個の区別する箱に入れる場合の数です。

OGFの積の場合

$$\sum_{n_1+n_2+\dots+n_K=n} 1 = \binom{n+K-1}{K-1}$$

- これは、 n 個の区別しない玉を K 個の区別する箱に入れる場合の数

EGFの積の場合(指数関数の冪 まとめ)

$$\sum_{n_1+n_2+\dots+n_K=n} \frac{n!}{n_1!n_2!\dots n_K!} = K^n$$

- これは、 n 個の区別する玉を K 個の区別する箱に入れる場合の数

このように、区別する/しないの違いがOGF/EGFの違いと対応することもあります(他の例もあるかも)

FPSを使って問題を解く

ABC 178 D - Redistribution

整数 S が与えられます。すべての項が3以上の整数で、その総和が S であるような数列がいくつあるか求めてください (mod $10^9 + 7$)

$f = x^3 + x^4 + x^5 + \dots$ とすると、 $f + f^2 + f^3 + \dots$ の x^S の係数が答え。

$$1 + f + f^2 + f^3 + \dots = \frac{1}{1 - f}, \quad f = \frac{x^3}{1 - x}$$

なので、「 x^3 に $1 - x$ の逆元をかけて、マイナス1倍してそれに1を足したものの逆元」を計算すれば求められる。

(実は $\frac{1}{1-f} = \frac{1}{1-\frac{x^3}{1-x}} = \frac{1-x}{1-x-x^3}$ なので、もっと簡単になる。母関数が有理関数なので線形漸化式があり、それを計算すればもっと単純になる)

積の和典型(続き)

長さが N ・各要素が1以上 M 以下の整数列 (a_1, a_2, \dots, a_N) であって、和が M であるような全ての数列について $\prod_i a_i$ を求めて、その総和求めよ。

$f^N = (x(\frac{1}{1-x})')^N = (x(1-x)^{-2})^N = (\frac{x}{(1-x)^2})^N$ であり、実は $(1-x)^{-K} = \sum_{n=0}^{\infty} \binom{n+K-1}{K-1} x^n$ なので、二項係数さえもとまっていれば、 f^N の M 次の係数は $\Theta(1)$ で計算できる。

$(1-x)^{-K}$ の n 次の係数が二項係数で表せる理由: 区別する K 個の箱に、区別しない n 個の玉を入れる方法の数え上げ(玉と仕切りを考えるやつ)なので、 K 個の玉と $n-1$ 個の仕切りを並べる方法の数え上げに対応するから。

積の和典型(続き)

積の和典型あるあるとして「掛けたいものを係数に持ってきて、和を取りたいものを指数に持ってきてがち」というのがある

積の和典型の例

ABC XXX Bolls in Boxes

(TODO: kaku)

参考文献

- <https://codeforces.com/blog/entry/77468>
 - OGF/EGFの定義からいろいろな性質まで扱っている(英語)
- <https://trap.jp/post/1657/>
 - traPのFPSの講習会の資料。計算方法や、問題を手計算で解く方法などが詳しく書かれている。
- <https://maspypy.com/>多項式・形式的べき級数数え上げとの対応付け
 - FPSで数え上げ問題を解く方法について。(2)や(3)も参考になる。